

読売選書



塚本邦雄

花隠論

現代の花伝書

隠論

現代の花伝書

本邦雄



読売選書

27

著者紹介

1922年9月、滋賀県に生まれる。歌人。
著書は歌集『水葬物語』『装飾楽句』『日本人
靈歌』『水銀伝説』『緑色研究』『感幻楽』『星
餐図』『蒼鬱境』『青帝集』『塚本邦雄歌集』
『茴香変』、小説『紺青のわかれ』『藤原定家
——火宅玲瓏』『連弾』、評論『夕暮の諧調』
『定型幻視論』『序破急急』『定家百首——良
夜爛漫』、散文集『悦楽園園丁辞典』など。

読売選書

花隠論

——現代の花伝書——

昭和四十八年八月三十日 第一刷
昭和五十年四月三十日 第二刷

著者 塚本 邦雄

編集人 松田 延夫

発行人 二宮 信親

発行所 読売新聞社

東京都千代田区大手町一の七の二一〇〇
大阪市北区野崎町七七七五三〇
北九州市小倉北区明和町一の一七八〇二

印刷所 図書印刷株式会社

製本所 ナシヨナル製本株式会社

定価 九五〇円 1395—301271—8715

©, KUNIO TSUKAMOTO, 1973

目
次

	I	花隠 一期一会とはいかなる狂気か	9
		火達磨詩法 藤原定家	29
		麦芽昏睡 あるいは受肉の倫理について	45
		迷宮晩餐	65
		風土記幻惑	73
		聴 現代詩への要請	77
		W i t t i n e s s	81
		月光垂迹 三島由紀夫と古今集・新古今集	87
		秋草園残花 会津八一	95
		さらば、むらさき 『岡井隆歌集』に註す	101
		金枝篇と金雀児と金絲雀 寺山修司詩解題	111
		断齧 高柳重信	135
		星夜の辞 島田修二小論	139
		ささの世のものがたり 西脇順三郎	145
	II	戦後派の言葉	153
		殉教について	161
		△VIE▽について	167
		偽証について	173
		現代短歌における方法の研究 その美学と倫理について	179

ひびきやみぬる	191
経緯純白 筏井嘉一研究	197
蝶に針 斎藤史覚書	209
鳥占擬き 山中智恵子歌集『みずかありなむ』に註す	229
耀暈離散 小野茂樹歌集『羊雲離散』への助奏	233
現代文学と風刺	239
「ナルシス」について	243
人間の終るところから 近代芸術の方法に関連して	249
夜と夜のあいだに	255
コクトーの周辺 アヴァンギャルドの反省	259
「溺死」其他をめぐって 戦後フランス画壇の展望	265
十一戒、或は蛹について	273
感幻学	275
ぬばたまの	279
詩人について	283
降るアメリカに 天井棧敷へ時代はサーカスの象にのって	287
聖・鬣狗頌	291
空間	295
『花隠論』跋	313
掲載誌一覧	314

装丁
栃折久美子

花
隱
論

現代の花伝書

I

花 隱

一期一会とはいかなる狂気か

ありと見てたのむぞかたきうつせみの世をばなしとや思ひなしてん

古今集 讀人不知

利休の師武田紹鷗は小倉山荘色紙の一枚を茶室の掛物に用いていたと伝える。茶掛といえは当時ま
ず絵は牧溪、墨蹟は無準師範などと中国渡来のもの、禅僧の書や賛と決っていたことを思えば、定家
の色紙などことさらに掲げるのは異例の試みであり、これは明らかな和様への変移、さらに推し進め
た侘好みの顕著なあらわれであった。しかも紹鷗侘茶の真髓は、新古今三夕の一つ、後年後鳥羽院が
隠岐本で削除した曰くつきの定家の名作、

見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮

の心に尽きると説いたと言われる。定家が生きのびてこれを知ったならば、いかに侘びようが枯れ
ようが、茶の湯なる芸もまた花、紅葉の変種、私の虚無には関るまいと苦笑したのであろうが、紹鷗の

茶の湯における本歌取精神もいわば一つの見識、これはこれとして面白かろう。紹鷗は茶を蜂屋宗悟に、香を志野省色に学ぶ一方、三条西実隆に親近してその経済を助けた堺の豪商である。皮革を一手に取捌いて巨万の富を得た軍需成金、小判と引換えに古今伝授的な和学の教養を逍遙院に仰いだ数寄者といえば言葉が過ぎようが、定家を会得して座右の銘としたことは奇特神妙のいたりであり、並の才ではなかった。少くとも後々利休が紹鷗の定家に倣って

花をのみ待つらむ人に山里の雪間の草の春を見せばや

なる家隆の歌にみずからの侘の真意を仮託したのに比べれば、一段とすさまじい心ばえではあった。それもさることながら、妖婆藤原兼子の袖に縫ってまで栄達を望みながら報いられず、その歌を達磨歌、すなわち禅問答ながらの難解作品と貶められ、終生切齒扼腕していた定家の、その現実の腥い修羅から生命を賭けて飛翔して花ひらかせた完璧な美学が、三世の後にこうして栄耀の果ての侘のクレドに援用されるとは、何たる奇縁であつたらう。

かつて師宗悟と並び称される名匠村田宗珠の午松庵のたたずまいを、時の連歌師柴屋軒宗長は

今朝の夜のあらしを拾ふ初紅葉

と吟じて手記にとどめたが、その頃萌芽の状態にあつた侘の紅葉が、紹鷗の才覚でようやく「なか

りけり」の切字にすれちがいつつもびぎあうまでになったのだ。

一期一会とはあつて無い、もしくは有つてはならぬ紅葉によせる眷恋の辞であつた。

もとよりこの辞は禪門の出である。そして一期の時、一会の時とは、『正法眼蔵』の

「盡界にあらゆる盡有は、つらなりながら時時なり。有時なるによりて吾有時なり。有時に經歷の功德あり、いはゆる今日より明日に經歷す、今日より昨日に經歷す、昨日より今日に經歷す、今日より今日に經歷す、明日より明日に經歷す。經歷はそれ時の功德なるがゆゑに、古今の時かさなれるにあらず、ならばもつれるにあらざれども、青原も時なり、黄檗も時なり、江西も石頭も時なり。自作すでに時なるがゆゑに、修證は諸時なり」

の敵しいメタフィジックであらねばならなかつた。道元が入宋して天童山の淨和尚まよに見えたのも、勿論彼の一期における最高の一会であつた。しかしその形而下の「目」なるメディアを通じての遭遇は、ついに己みずからに邂逅するための手段以外のものではなかつた。しかもめぐりあつた自己とは、

「佛道をならふといふは、自己をならふなり。自己をならふといふは、自己をわするるなり。自己をわするるといふは、萬法に證せらるるなり。萬法に證せらるるといふは、自己の身心、および侘己の身心をして脱落せしなるなり」

と滅却しつくした果てに確認される虚無、ただそれのみであった。『正法眼藏』のいたるところにあらわれるこの執拗無類の追覆曲風弁証法によって収斂されつつ逆に無限に膨れ上る「時」とは、単なる次元の呼称ではなく、超次元、異次元の眩暈く宇宙観ではなかったろうか。その、時の坩堝の真空の中では、己ひとりの存在は微少をはるかに越え、浄化を重ねたすえの、虚無とならざるを得なかった。そして道元風の果断な飛躍を用いるなら、その虚無とは無尽数の花、紅葉を虚空に鏤めた鮮烈な無のよみがえりの相であった。

「ただ春秋に華果あるにあらず、有時かならず華果あるなり。華果ともに時節を保任せり、時節ともに華果を保任せり。このゆゑに百草みな華果あり、諸樹みな華果あり」

そして人樹にも人華にも枯木にも華ありと説き、その巻にいみじくも「空華」の名を掲げた。

おのずから定家の「花も紅葉もなかりけり」とはその理想、希求に分つところはあろう。しかし分ちつつも断ちがたく呼び合う微妙なひびきが蔽としてある。

うつつには一期不会の二人を繋ぐのは血脈であったろうか。水よりも濃い縁は錯綜しながら傾いてゆく藤原、御子左家家系の中に明らかに浮び上る。

実父母に幼少の折別れた道元の、異母兄にして養父なる源通具は新古今選者の一人である。しかも通具はその新古今の中で式子内親王や宮内卿と比肩する女流ベスト・スリーの一人俊成卿女を最初の

妻としている。俊成卿女は定家の長姉の娘で父俊成の養女となった。

三歳で死別したとはいえ、道元の父は当時後鳥羽院の側近、反幕派貴族のリーダーとして辣腕をふるっていた名門中の名門、定家父子その一族も愛憎、ことに憎の深さによって繋がれていたに相違なからう。

定家が「花も紅葉もなかりけり」と歌ったのは道元の生れる十四年前、二十五歳の時であり、平家が壇浦に潰滅したのはその前年、また西行が入寂し源頼朝が上落したのはその四年後の出来事であった。

道元は十四歳で天台座主公円の下に出家した。十年後に入宋して三年間の只管打坐ひたすま、彼の心には、詩歌を含むすべての芸術も無の中に包含されるべき一要素に過ぎず、彼の無そのものがあえて言うならたぐいえない美学となりおおせていた。

道元は詩歌を顧ることなく詩歌を超えた。『正法眼蔵』の空華は、地華は、世界華は、すでにポエムの領域では感得不可能なポエジーの認識であり、ロゴスであった。そして一方定家はほぼ時を等しくして天台の摩可止観に没入してゆく。摩可止観は法華経三大注釈書の一、その二十巻の中十巻の書写、移点、校合はなまなかの志で遂げられるものではない。天台座主快修を伯父に、慈円を主家にもち、子定修を檢校成円の弟子とした浅からぬ由縁もあったらうが、一方には愛読の書『白氏文集』の底に流れる詩禪一如の心、詩文と寂照禪の融合を冀う作歌理念の昂揚が、定家を一途に天台へ誘ったのであろう。

道元の無の「有時」、定家の無の「有心」は、ついに不会のまま、平安朝の虚空ですれちがう。

二十五歳の定家は花と紅葉を無生誕のメディアとしてふりかざさねばならなかった。しかし言葉は恐ろしい。いくら無しと切棄てても、一度見た花、一度ひびいた紅葉の幻像はこの時間の中にあざやかに痕跡をとどめ、それは否定することによってより明らかに顕つのだ。まことは言葉すら空しい。花も紅葉も苦屋もすべて無用の空白の世界をこそ示現すべきであった。定家の歌も定家自身の精神の変転深化につれて、いくたびか真意を変えて行ったことであろう。詩歌の未練であり陥穽であり業である。花と記し紅葉と口遊み苦屋と歌わねば表現のまことに触れ得ず、なかりけりということわらねば心を尽し得ぬ不如意に、万葉以後の選ばれた詩歌人はひとしく臍を噛み続けて来たのだ。

道元の一期一会は、言葉を変えるなら無尽時無尽会の豊饒な近いであり、一切を否定することによって有限の世界は消え失せ、代りにみずみずしい無限の世界の生れ出る機縁であった。

定家はその一期の初めに会った花、紅葉をその場で打消すことによって、ついに一会の口惜しさに終生身を顛わせ続けねばならなかった。一期なる有限の生の、一会なる一回性に賭ける空しさを、誰よりも沁みて識っていたのは定家ではなかったろうか。その対象が言葉そのものであるのを確認した時、詩歌人はすべて啞にならねばならぬ。

それを狂気と呼び得るなら呼ぼう。空しさを知悉しつつなお有限の生における一回性の選いに執する言葉の煩惱、無限大に膨らみながら無限少の人間を認めざるを得ぬ思惟の妄執、みな真理を視たいと希求する心のものぐるいが生んだ幻の相ではなかったか。